

堀田善衛の「家」と文学

— 『醉漢』を読む —

山下 宏明

— はじめに

岩波書店の総合雑誌『世界』、一九五七年の一月号に堀田善衛は『鶴のいた庭』を執筆している。生家を主題にする物語だとわたくしには読める。^① 自伝的事実をフィクション化してゆくと言うべきか。スターリン批判や、日本の国連加盟、さらに南極に日本観測隊が到着、岸信介内閣の組閣などがあつた頃で、良くも悪くも世が動き始めた。

物語によれば、堀田家は、善衛が（大正七年に）生まれた家から大正十三年（一九二四）岡の上の新しい家に移った。政友・憲政・革新の三派が、総選挙の末、第二次護憲運動を行ったが、共産党の解党、小学校で視学官が自由教育を攻撃し、旧制高校校長会議で社会科学研究団体を解散させるなどの動きがあり、これも曲がり角にさしかかる年であつた。

新しい二階建家の屋根に登つての体験、あるいはさらにその空中から伏木の町を俯瞰する語り手の視座を想定すべきであつたか

堀田善衛の「家」と文学（山下）

と今になって考えなおす。

一九八三年十一月、富山大学へ出講したことがきっかけになつて、この生家を描く『鶴のいた庭』を再読し、さらに勤務校、名古屋大学を定年退職した後、私学に職を得て、一九八三年当時を思い出しつつ、この小説を素材にして堀田の文体を読み解こうとしたのだ^②。

本稿を執筆、加筆を行っている段階で、堀田の『空の空なればこそ』^③におさめる「鶴屋善右衛門」にめぐりあつた。正和勝之助の『越中伏木港と海商百家』を引き、堀田自身が

かつてこの海商の歴史を書こうとして、そのアタマの章にあつた『鶴のいた庭』というものを書いたことがあつたが、
 と言ふ。一九九五年十一月の執筆である。

わたくしの、堀田の文体への関心は、専攻する中世の戦物語についても変わらない。

今回、ドイツ文学からハンガリーにも手を広げる丸山珪一に誘われ、二十数年昔を思い出しながら、専攻する戦物語がクロスす

る、しかし、どうやら堀田にとっては割愛の対象になつたらしい小編の『酔漢』と再会したのだつた。

二 曾祖父の思い

大正十一年(一九二二)正月元旦の早朝、堀田善右衛門が九十六歳で死去したと見えるが、丸山によれば明治三十八年(一九〇五)、日露戦争が終結する年、享年八十歳だつたと言ふ。物語によれば、その前年大正十年の大晦日、と言えば海軍軍備制限条約が議論される時代である。丸山は、その虚構を「明らかに廻船問屋の没落に立ち会わせるためである」と言う。「例の、やまいを起し」(圏点は山下)とは、たえずこの行動を行つていたのであらう、善右衛門は、旧廻船問屋を支え、北海道から帰港する鶴屋の船を見届けて来た望楼に登らねばならぬと言ひだし、

あたりをゆっくりゆっくり、まったく無言で、見渡す。五分もそうしていると、もうよそ眼には飽きたのではないかと思われて来る。「ほつ、ほつ、ほつ……」と声に出す、と忽ち下りようという。

そして物語によれば、その翌日、死去したのだつた。どうしてなのか。「ほつ、ほつ……」という声に曾祖父の思いがこめられていよう。小説では堀田の生家の庭に飼育されていた二羽の鶴と、それを追うはつつ、あ老人が堀田家の歴史を物語っている。話を

『酔漢』にもどすが、その背後には時代を動かす政治に寄せる堀田の思いがあつた。

三 『酔漢』について

一九七五年版の『堀田善衛全集』10に「はじめて収録」されながら、同じ筑摩書房の九三年版の全集には収められていない。『文芸』一九七二年一月号に掲載されたもので、新年号と言え、おそらく依頼による執筆であろうと想像しながら読み始め、その素材にすぐ気付いたのであつた。物語の末尾に「(筆者注記、抛源平盛衰記)」と明記して、堀田の文学として当初読むむたくしを啞然とさせたのであつた。同じ時代を語る『平家物語』とも違つて『方丈記』の読みとは明らかに異質で、一体何が堀田をして異例の出典明記の上、この『盛衰記』を採らせたのか。

『方丈記私記』に語るところだが、堀田の好みにあわない『平家物語』巻一の語りに即して内容をかいつまんで語ると、

平安末期、摂関家の介入に反発する後三条上皇の遺志を継ぐ白河院が拓いた院政の継承を意図する後白河院が、保元・平治の乱に見るように、摂関家をとりにまく諸勢力、それに王権守護の任に当たる比叡山や南都の権門寺院までもが、ご多分に漏れず対立し、それにそれぞれが内部分裂をも来たしている。日本の現代が、この中世の転換期に始まると言つても過言でないかも知れない

い。物語の巻一の読みに、言語学者の時枝誠記が、その現象学に基づく文章論の観点から『平家物語』の始まりの巻の主題を、平家の亡びといった単純なものではなく、諸勢力角逐抗争の歴史と読んだのだった。⁽⁵⁾

物語が語るところだが、後白河院は、当時の輻輳した対立状況を巧みに利用しながら、みずからの治天の君としての座の維持を志す。ところが、その警固に当たる北面の武士が、任国、加賀の国で、これは天台座主の莊園を管理する、白山神社の末寺である鶴川寺で狼藉を働いた。その北面の武士のあるまじき行動を、白山が山門、延暦寺へ訴えたものだから、ついに山門の大衆が動き出す。白河院をして「賀茂川の水、双六の賽、山法師、是ぞわが心かなはぬもの」と嘆かせたと『平家物語』が巻一「願立」にも山門の動きを語る、その山門の僧兵たちである。

物語によれば、みずからの座を確保するために、しばしばこの山門の大衆を唆すことよって対立者を牽制していたのが政治家としての後白河院である。後白河は、山門の動きを放置できず、当時ともに内裏守護の任にあった源平両氏の武士に命じて防御の任に当たらせる。始め、院の命を受け、小勢で内裏の北、朔平門を固めていた摂津源氏を攻めるのを、京侍として宮中にも得意の和歌を介して出入りしていた頼政が、内裏の東面、大宮大路の特に三つの門を「大勢で」守る平家の陣を攻めるのが効果的であろうと唆す。あえて頼政の守る朔平門を攻め効果を揚げようとする

若い衆徒を老僧がおさえて、平家小松家の待機する待賢門を攻める。職務に忠実な平家の軍が山門の日吉山王の神輿に矢を放つ。これを受けて、大衆たちは神輿を投げ捨て山へ帰ってしまうことになったのだった。

困ったのは後白河ら王朝の人々である。下手に手を出せない。叡山の説教を担当する安居院の澄憲が大衆を説き伏せてようやく神輿を祇園社へ入れる。

その後も、山門は強訴、下洛の構えを崩さず、朝廷は、やむなく鶴川寺事件の張本人となった北面の武士兄弟、藤原師高を闕官、その弟で代官であった師経を禁獄に処し、「神輿射奉りし六人を」入獄させたのだが、怒りの醒めぬ山門。その山王の使者だとされた猿が「二三千おりくんだり、手々に松火をともいて京中を焼くとぞ、人の夢には見えたりける」、これが物語の巻一を閉じる安元の大火の物語としての読みである。語りの中に第三者としての世論、語り手から見て、その事件を見る、一種の映し手とも言うべき「人」を語らせるのが戦物語の語りで、時に「心ある人」の声の発声を求めること、『保元物語』『平治物語』から『平家物語』を含む三つの戦物語が相互に通じ合っていて、しかも安元大火の場合、その人々の「夢」を介入させて語る。堀田が嫌った、一種のポピュリズムを持ちこむのである。この種の人々の声は現代でもしばしば見られ、これを操る政治が行われて来たのであった。しかし物語の文脈としては延暦寺の守護神、日吉山王の

怒りを介し、院を軸とする王朝社会に対する批判を人々の思いとして語るのが物語であった。

堀田は、中世史学者、原勝郎の論を引き

絶え間のない戦乱、政治的惨劇、飢饉、悪疫、地震、洪水、大夏高樓の炎上滅燼、天変地異相繼いで至り、よくもまあ神様はこれほど丹念にひどいことばかりを集めたものかな、と呆れたくなるほどのひどさ

の中、

あそびをせんとやうまれけん

たはぶれせんとやむまれけん

あそぶこどものこゑきけば

わがみさへこそゆるがるれ

とは、後白河が関わった『梁塵秘抄』がおさめる「はやりうた」を中世、鎌倉末代に京の巷でうたわれたものであると堀田は言う。

書誌によれば『文芸』一九五五年一月から十二月まで連載された『人間の条件』の一節に引くもので、

また(一九四五年)三月九日夜から朝にかけての東京爆撃のあと、友人の安否を訪ねて深川本所あたりをうろつき……私 はしきりと方丈記やその他、鎌倉末期の文学文献のことを考えていた

とも記し、

鴨長明の「方丈記」は、私にとって絶えざる戦いの相手である、などといえば不そんなことを、と文句の出る向きもあるかもしれないが、身近な相手としての文学古典をもちえないならば、古典は、しょせん一種の飾りものになってしまいうであらう。

と言う。堀田にとって『方丈記』との出会いは大戦の時の体験が契機になつたらしい。

鴨長明が、乱世に処してあれだけの描写力をもっていた無常観の深さによる。無常観とは、いいかえれば、一つの生命観のことである。

とまで言い切る。一九五〇年代の国文学の中世文学論で議論された抒情に基づく「無常感」や、哲学としての「無常観」とは別だとする文学批評の世界とは異なる実存的な世界であった。

それは、これも堀田自身が「空の空なればこそ」の章を結びとするタイトル⁽⁸⁾が

旧約聖書中の『伝道の書』にかかわって選んだものであったと言ひ、

伝道者言く、空の空、空の空なる哉、都て空なり、日の下に人の勞して為^{なす}ところの諸の動作^{はたらき}はその身に何の益かあらん。と引き、

即ち我はわが諸の勞苦によりて快樂を得たり。是は我が諸の勞苦によりて得たるところの分なり。我が手にて為^{なす}

る諸の事業、および我が勞して事を為たる労苦を顧みるに、皆空にして風を捕ふるが如くなりき。

我また身を転らして智慧と狂妄と愚癡とを觀たり。(中略)

嗚呼、智者の愚者とおなじく死るは、是如何なる事ぞや

と引用し

人間の根源的な実存条件が提出されている。そして具体論に入って行く

と言い、

この現実論、あるいは社会的不条理についての認識は、おそらく如何なる現実論よりも現実的である。「汝、義に過るなかれ、賢に過るなかれ」とは、よくもよくも言ったものである。これこそは「都て空なり」と認識した者にしてはじめて言い得る言説であろう

と言うわけである。この手記を記した一九九七年十二月の翌年五月、脳梗塞を発症、九月五日、八十歳で死去した堀田である。

四 堀田の『方丈記』の読み

わたくしの現役時代であった頃の体験である。一九七〇年七月号から七一年四月にかけて『展望』に連載された『方丈記私記』は、古典をとりあげながら、現代批評の作品である。今回、とりあげようとして、まず頭に浮かんだのが、上述もした、その冒

堀田善衛の「家」と文学(山下)

頭、安元の大火を読みながら、一九四五年三月九日から十日にかけての東京大空襲で、その大火に、深川に住む「一人の親しい女」のことを思いやり、『方丈記』の言説「その中の人、現し心あらむや」であった。梅田祐喜は、この「女性のことをすっかり忘れてしまった」ことを「杜撰や怠慢」と批評する。このことは改めて考えてみたい。

目黒区の洗足にある友人の家から見やる東京の空を焦がす炎を見る、みずからの体験が、『方丈記』の一節を思い出させ、親しい女を思いやりながら、なすすべもない、

私は人間存在というものの根源的な無責任さを自分自身に痛切に感じ(圏点、山下)

たのだった。人間の存在を優先させる実存主義のそれだった。

前に掲げた『鶴のいた庭』に堀田家の行方をも、こうした思いでとらえた堀田だからこそ、「ゆく河の流れはたえずして」戻らない、「世の住か」もかくのごとくと堀田なりの「無常觀」を体感したのであった。この大空襲による大火の翌日、堀田が鴨長明同様、「いわば一種の実証精神に」かられ、深川の現場に出かける。堀田自身がその同じ体験をし、そこで目にした日本の国家、というものを体験したのだった。私事にわたるが、私自身が東京大空襲があった、一九四五年の三月十七日の夜の神戸大空襲の翌朝、自宅から約一キロ半の新開地近くの焼け跡へ出かけ、猛火の中に苦しんだのであろう、手を突き上げながら息絶え炭化した数

体の焼死体を見かけ、焼けただけた自転車の下敷きになった子ども、これも炭化した焼死体を丸腰の陸軍兵士がスコップで処理する光景を目にしたのだった。その場面を今も思い出す。正直言って不思議な無感動に陥っていた。堀田の『方丈記私記』を読み返す、今のわたくし山下の思いである。あの神戸空襲があった後、艦載機(グラマンと言ったか)の襲来が始まり、その日、目の前、十数メートルのコンクリー建て産院の付け根に銃弾が撃ち込まれた。今思えば、わたくしを狙っての銃撃であったとぞつとする。一、二秒にもならぬ瞬間のずれが今日のわたくしを生きさせているのだった。

堀田に戻れば、『方丈記』を踏まえて安元の大火を語りながら、「その中の人、現し心あらむや」という体験を欠く『平家物語』が、それは方丈記の文章を利用した、というよりは

これに尾ひれその他のびらびらをくつつけて飾ったものであるにすぎない。

一つの歴史的事件というものが、それを徹底的に生きた人によって、身に刻みつけるようにして録された場合に、他の筆者が如何に別様にこれを記そうとしても、徹底して生きた者の刻み込んだものによって、徹底的に拘束される

と言う。堀田の文学の根底を規定する実存的な思いである。したがってことばのドラマを感じ取る木下順二とは違って堀田は衆庶の思いを介在させる『平家物語』を信用しない。

五 成田為成が飲む酒

その堀田が問題の安元の大火に取材しながら、『平家物語』の異本、『源平盛衰記』を用いて『酔漢』を書いたのはなぜなのか。山下が堀田の言説をどう読むかを語らねばならない。

安元三年、改元されての治承元年、西暦にして一一七七年、

四月廿八日の夜、京都樋口富小路

と言えば、その安元の大火の語りを読むための堀田の注釈である。

そしてただちに

四月廿八日の夜、京都樋口富小路の小家に、五人のさむらいが集って、酒を飲んでいた。

と事件を語り始める堀田善衛。酒宴の「中心人物」は成田兵衛為成で、堀田が明かにした出典『源平盛衰記』巻第四「京中焼失」では

是ハ神輿ヲ奉_レ禦トテ狼藉ニ及武士七人禁獄ノ内、十禪師ノ御輿ニ矢ヲ射立進セケル。成田兵衛為成ト云者ハ小松殿ノ乳人子也。コトニ重科ノ者也^①

平家一門の小松殿と言われる平重盛の乳人子、すなわち乳母を同じくする乳兄弟であったと言う。この安元の大火について『盛衰記』の校注者は、右大臣であった撰関家九条兼実の『玉葉』安元三年(一一七七)四月廿八日当日の条を引用する。大火の経過

を記し、当時の御所、閑院殿は無事であるが、主上や中宮は難を正親町東洞院の藤原邦綱邸へ行幸あったことなどを詳細に引用しているが、この成田為成については記録が見えず、未詳。果たして実在の人物なのか。『盛衰記』特有の虚構の人物の可能性が無いでもないだろう。奇妙なテキストである。

何のための酒宴なのか。酒宴であるにもかかわらず、まことに浮かぬ顔つき

とは堀田が語る。酒を呑む為成、いや、かれを囲む

四人の男たちもまた、同様に浮かぬ顔つき

である。

酒は飲めば酔うものである

にもかかわらず

為成をも入れて計五人の男どもが、ともどもに鬱陶しく、かつは物も言いたくないほどに莫迦莫迦しい心境で、砂を噛む

ようにして酒を飲まなければならぬについては、それ相應の理由があった

と語り手は語り始めたのであった。

その由来が莫迦莫迦しいのであるとして、まず国司近藤師高なるものが弟の師経を目代に任命した。そして兄がやりたい放題に、神社、仏寺、権門勢家の庄領を没収し尽くした。

その兄に負けたくなかった

と語るのが堀田の原典の読みである。堀田が事件の経過を原典の

堀田善衛の「家」と文学(山下)

『盛衰記』に即してたどり、

(事が) こじれにこじれて

山門大衆の僉議の末の決議文を

謹ヤマトデ白山妙理権現ノ垂迹ヲ尋ネ奉レバ、日本根子高瑞淨足姫御宇、養老年中ニ鎮護国家ノ大徳神融禪師行オコノイ出シ給テ……

とその威徳を語るのだが、その出典はわからない。おそらく『盛衰記』が何らかの史料によったもので、堀田はそれを引用した。

『平家物語』の、いわゆる読み本と呼ばれるテキストには、この種の資料を引用して、物語読解のための注釈を行う姿勢が濃厚である。⁽¹²⁾

これらの記録は、堀田が注として語るものではなく、すべて『源平盛衰記』からの引用である。

その経過を要約してたどると、強訴に及ぶ山門大衆の防御に指名された清和源氏、宮廷守護に当たる源頼政が巧みに大衆の動きを躲かわそうとするのを、若者たちが一も二もなくぶち破れと主張する。協議の上、頼政の提案を入れることになり、方向を転換して陽明門を攻めることになった。要約のスタイルをとる語り本『平家物語』によれば、

東の陣頭、待賢門より(神輿を)入れ奉らむとしければ、狼藉忽ちに出て、武士ども散々に射奉る

これが日吉山王の怒りとなり、神の使者である猿が内裏に火を放つことになるので、堀田はこの間の目代師経の動きを原典の

『盛衰記』に即してたどり、師経は少々やりすぎたかと悔い入り、京都へ逃げ帰っていて庁に人影がなかったと語る。

以上、この間の堀田の言説をわたくしなりに略述したのだが、後日、山門大衆の重ねての強訴に、やむなく当局は、事件のきっかけをなした鶴川寺事件の狼藉の主、加賀の国司師高を解任、その弟目代(代官)師経は尾張へ流罪に処し、「神輿射奉りし武士六人、獄定せらるる」、「是等は皆小松殿の侍なり」とし、堀田は、事件の原因を作った

師高・師経などという代物は、たかが下北面の武士上がりりの成り上がり者にすぎない

その事件というのが

実^{まこと}以て莫迦^{まが}莫迦^{まが}しい事件であった。しかし、時代の崩落^{くわらく}は、莫迦^{まが}莫迦^{まが}しかろうがなかるうが、どこかに含蓄^{こくごう}されて行かなければならぬ(圏点、山下)

と語るのが堀田である。二人の処理をぐずぐずと放置をしておいてはろくなことにならぬ。がしかし、ぐずぐずのんべんだらりは官廷の常であって、『盛衰記』は

内々は私語^{こひご}申しけれ共、言に顕て奏聞^{そうもん}の人なし。理^{ことわり}や大臣は祿^{ろく}を重じて諫^{かん}めず、小臣は罪を畏れて言はず、下の情上^{じやうじやう}に通ぜず、この患^{うれい}の大いなり、と云ふ事あり、されば各々口を閉じたりける。

と記している。

ぐずぐずしているうちに、四月に入り

山門が当局の遅滞に業を煮やして上記の大衆の強訴になったのだった。

朝廷は周章狼狽、急場の時に用いる腰輿に乗って法住寺へ逃亡することになった。その朝廷とは、清盛が娘、徳子を入内させ、その仲に言仁(後の安徳天皇)を儲けることになる高倉天皇である。法住寺とは後白河が院の仙洞御所とした寺である。山門大衆の強訴に対し、朝廷の防衛の任に当たったのが小松家、平重盛率いる軍勢であった。武器を持つ武士に大衆は叶わず、あげくは武士が神輿に矢を放つことになった。堀田はこの間の経過を『盛衰記』に従いながら、時には要約してたどった。大衆は神輿を投げ捨てて山中に籠もろうとする。職務放棄である。困惑した朝廷は師高・師経兄弟を解任、流罪に処し、命令により直接矢を放った官兵七人が禁獄されることになった。その七人の中に例の為成がいたと語るのである。

重盛とは乳兄弟であり、その重盛の命令によって矢を射たのであった。激怒する山門の大衆は、為成を琵琶湖の唐崎で磔^{はりつけ}にしてやるとか、臥漬^{ふし}け、簀の子巻^{すいこまき}にして「水中に叩き込む」など意気込むのを重盛が宥^{なだ}め、為成の「禁獄をも乞い許して(平家の本貫、出身地である)伊賀の国へ流すことに妥協を見た」(圏点、山下)のであった。

ここで問題の宴^{うたげ}となる。堀田は、いよいよ物語のピークをなす

ところで、「莫迦莫迦しい話である」と書き始める。「酒は飲めば酔うものであった。あまりの莫迦莫迦しさに、飲みかつ酔うても、はかばかしいことばも出ない。「莫迦莫迦しき」とは、たかが山門の末寺での争いが山門強訴となつて、朝廷として防御せざるを得ない。これが世の動きというものである。政治責任のとり方を指して言うものであろう。奥に天皇、それに後白河院があること言うまでもない。うまく難を避けた頼政のお鉢が回つて来た重盛が防御に当たり、その部下が神輿に矢を放つ。重なる山門強訴の動きに、重盛なりの奔走があつたのであろう、やむなく乳兄弟の為成を、せめて伊賀の地へ送ることになつたのだが、為成にすれば、重盛の指示のままに王朝を守ろうとして、神輿に矢を射る結果となり、極刑は免れたものの、なぜ責めを受けねばならぬのか、わからない。戦にしばしば行われる処理の仕方なのか。

同じ思ひの同僚がせめてもの饒別の宴を開いてくれたのである。けれども盛り上がらないばかりか、沈む一方。同僚の一人が饒別の「肴として」と自分の頭の髻を切つて投げ出した。髻は昔の男子が元服し、成人として認知される大事なものの、それを切つて投げ出したのであつた。出仕は不可能になろう。

「するともう一人の同僚が」片耳を切つて座に投げ出した。

やがて三人目は「いちばん大事な財といえは、所詮は命」と「腹を掻き切つて」どろと倒れた。為成自身は

もはや京へ戻つて酒を飲むこともあるまい

と、これも「腹を掻き切つて、臥した」。この惜別の座を儲けた「小屋の主」が、こうなつてはわが身が

六波羅へ呼び出されてまたまた難儀なことになる。家に火をつけておれも死ぬ。髻と耳を切つた二人がどうしたか、それは分からぬ。

とし、ここで

方丈記に鴨長明が言う、

として、

去安元三年四月廿八日かとよ。風烈しく吹きて、静かならざりし夜、戌の時許ばかり、都の東南より火出で来て、西北に至る。

はてには朱雀門、大極殿、大学寮、民部省などまで移りて、一夜のうちに塵芥となりなき。

と結ぶ。ここまで来れば、わたくしの頭をよぎつて早々と見えていた『盛衰記』が立ち現れる。堀田がしばしば発する「莫迦莫迦しい」の語をどう読むかは、われわれ読者の読みが課題となる。わたくしには、つい清沢冽きよしの筆致になる『暗黒日記』⁽³⁾を思い浮かべてしまふ。

それは堀田の小説の読みの課題でもあろう。本稿冒頭に見た堀田家の歴史を語る『鶴のいた庭』で

この『家』の潰滅せざるをえなかつた時代のうつりゆき、経済的、政治的なもろもろの理由

と無縁ではないだろう。

始めに引用した堀田の「鶴屋善右衛門」においても

明治中期から大正の末年にかけての年月は……この大変換期は、同時に船舶業というものが、政府の支援なくしては運営しがたいものになって行く過程でもあった。

と言う。

その延長線上に、国家を表す総合商社に驚嘆しながら、それらを滑稽に語る『19階日本横丁』もあるだろう。⁽¹⁴⁾「横丁」という日本語の名詞、敢えて十九をアラビア数字横表記を行ったところから笑いがある。この総合商社の小説の読みについては、まだまだわたくしの手の及びかねる問題があるだろう。ただモスクワが舞台とおぼしき宿舎に集まる人々とは、まさに小説の世界であるのだが、

「総合商社」なるものを見てみると、そうだ、これこそが日本国家じゃ、国家の実体とはこれじゃなからうか、という錯覚をもたぬとも限らなかつた。

と言っている。ここにも堀田の文体が見られる。

それにしても堀田が『方丈記』の事件への直接体験者ならぬ、その長明の体験を借り用いる『平家物語』を拒む堀田が『源平盛衰記』に目配りしたのはなぜなのか。堀田の引用したのが『盛衰記』であった。『平家物語』を読み続けて来たわたくしには、これまたこれからの『平家物語』論の課題とすべきだろう。

原作者へと集約しがちであった、いわゆる国文学が、文学批評

の中で相対化され、文化史への展望をも踏まえて、いかにテクストを読むかを問い始めた若い世代が、この堀田の文学にも鋭い読みを挑むであろうことを期待してやまない。

六 多声的な『源平盛衰記』

院の北面の武士、師高・師経兄弟の処罰について、その内容を示す宣言を山門に伝えようとするが

衆徒ノ蜂起ニ恐テ登山セント云人ナシ

とは、語り本『平家物語』にも語るところで、

其時ハ中納言ニテ御座ケル

平大納言時忠が、その伝達の任を買って出て、「瞋レル」山門衆徒をみごと抑え切る。この間発せられた宣言と「追書」を公文書のスタイルを再現して掲載する。この間の時忠の行動を褒める大衆のことばから、『世説新語』に見える魏の文帝の、同母弟陳思王に対する殺意を鎮めた話を想起して語るのは、『太平記』の引用の方法にも通底する『盛衰記』の語りである。

ここで問題の成田為成の自害を以て安元の大火の原因を語り、その大火によって焼失した諸殿を列挙して

諸司八省マデモ皆消亡ヌ、浅増ト云モ愚也

と結ぶ。

問題は、『盛衰記』は、目録に従い「盲占」を重ねて立てる。

大炊御門堀川ニ、盲ノ占スル入道アリ

として別の話を加える。

火本ハ樋口富小路トコソ聞

との噂から、この入道が、その火が身近に迫り「ユウシキ大消亡カナ」と明言し、「在地ノ人々」がその備えあるべきことを語る。火もと「樋口富小路」が盲目のいる「大炊御門堀川」からは隔たる地であることから人々が不審がるのを盲人は、視角ならぬ、よみ、音を解釈に持ちこみ、「樋口」を「火口」、「富小路」から「鳶」を連想、「鳶ハ天狗ノ乗物」、愛宕に住む「天狗ノシハザニテ」「筋違サマニ焼ヌト覚ユ」と語った。こうした、音を介しての文字説きは『太平記』にも見るところだが、天狗のしわざとする盲人の理解を

人嗚呼ガマシク思ケレ共、焼テ後ニゾ

盲目の文字説きによる延焼予言を「思合ケル」と結ぶ。盲目ゆえの、笑いやアイロニーをも含む、神にも通じる神秘的予言を語る声である。人物評に天狗が登場する時代であった¹⁵⁾。

そして、その後に、語り本が語る、日吉山王の怒りによる、神の使者、猿の放火と「人ノ夢ニハ見タリケル」と語り巻四を閉じることになる。日吉山王の怒りに天狗の介入を語り加えて安元の大火を考え、(さらに正体は目下不明だが)成田為成の、政治への嫌悪を語り加えたのであった。

この『盛衰記』は、琵琶法師を軸とする、永積安明らをして集

堀田善衛の「家」と文学(山下)

团的想像力の所産、叙事詩と言わしめた語り本を破壊する。語り本では南都攻めの大将軍としての重衡が自らの立ち場を自覚する、それゆえに頼朝にも一目置かせる人物として語った。また法然をもして救済の対象とさせたのだが、『盛衰記』は重衡の正室の目を憚る側室を日陰者として語り、その屈折した思いを描く。それゆえに、ある意味で汚い¹⁶⁾。史学を哲学的に考えた津田左右吉をして

甚だしく知識的であり、

とか

平家の事績によって強く感動するよりは、寧ろ知識的な好奇心を以て、遠き世の事として、それを見るやうになった時代の所産だからであるまいか

と言わせた。¹⁷⁾

堀田善衛が、その『盛衰記』に惹かれたのは、政治を莫迦莫迦しいと見た、醒めた自我があつたゆえだろう。しかも新しく編んだ全集には、この『酔漢』をおさめるのを避けたのはなぜだったのか、いまだにわからない。さらに広く堀田を読むべきだろう。

少なくとも『平家物語』論の観点から見れば、読み本ならぬ語り本の位相を確かめる一つの手がかりを与えるテキストであった。文学作品の成立を考えるために、その引用探しを行うのが一般なのだが、むしろ出典そのものの受容のあり方に諸テキストのありようを考えるのも一つの課題だろう。

安元の大火という、事が王権⁽¹⁸⁾の存続を保障するはずの大極殿の焼失に及び、王権の行方に警鐘を鳴らす、『盛衰記』なりに複数次元にわたる安元大火を語る『源平盛衰記』であった。『盛衰記』を読み本の一つの典型として、増補系に分類を促したのだが、それは安元の大火という王権の大事に説き語る歴史の読みを列挙する、多声的な語りの一つでもあった。

『源平盛衰記』をめぐる、これまで多様な論が行われて来た。わたくし自身が、本文の言説をめぐる「読みかえ」⁽¹⁹⁾、文化的状況の中にその語りの方法を論じ、美濃部重克が『平家物語』に新たな解釈を加え、史書を物語として仕立て直した稗史⁽²⁰⁾(歴史小説)と見た。本稿では、堀田善衛を介して、その現代批評としての手がかりを得ようとしたのであった。

七 諸本論の中の『源平盛衰記』

『平家物語』の諸本論と云えば、水戸藩による『大日本史』編集のための資料として諸本を集め異同を併記した『参考本源平盛衰記』、いわゆる「参考本」があり、『平家物語』諸本論の嚆矢と言ふべきであろう。当時、どうしたわけか、いわゆる延慶本と呼ばれる異本は射程に入っていなかった。

この水戸藩の方針を継承したのが、鎌倉時代の日本語を探る手がかりとする『平家物語』のテキストを求めた山田孝雄の諸本論

である。

それは参考本の示唆を受けて多様な諸本が伝わる事を知っていた山田は、改めて諸本の構成、特に建礼門院を軸にする灌頂巻の有無を顕著な違いとしてとらえ、その外、剣巻などの言説の有無などを分類基準の手がかりとしたのだった。

こうした諸本の分類を軸として、改めて『平家物語』の成立や作者論などの検討を加え、物語の成立を進めることになった。

このような成立論は『源氏物語』や『伊勢物語』『土佐日記』など代表的な古典の研究をかけた軌を一にする。

『平家物語』の場合、その山田を継承するのが高橋貞一であり、これらの諸本研究を作者研究にも活かそうとしたのが高木武や富倉徳次郎と、特に佐々木八郎は、語り物としての『平家物語』の、文体にも及ぶ物語論をあわせ行うことになる。おりから岩波書店の日本古典文学大系の編集が始まる。当時、敗戦後、英文学に倣って叙事詩論を掲げる高木市之助を軸に『平家物語』論の再検討が始まる。高木や永積安明の叙事詩論を意識しつつ諸本論を取り上げた渥美かをるは、特に富倉・佐々木、そこへ『平家物語』を中世文学の中にどのように位置づけるかを考えることから、それに作者の思想を考えるための古態論の課題としたのだった。

それらを継承するのが、われわれの世代で、高橋貞一により明確にされた語り本と読み本の分類に基づき、高木市之助・永積安

明らの叙事詩論を意識しながら、おりからの史学者が中世史料を求めて延慶本を中軸とする古態論から、文化史論への関心を深めていった。

その中でも、語り本よりも読み本、特に史料批判から延慶本、その史料性を補うために祖系を共にすると思われる長門本が注目され、麻原美子が、特に延慶本を補うために注目する。この間、読み本三本の中の『源平盛衰記』が枠の外へ出されることになることが多かった。

この三本を軸に、その周辺の『源平鬪諍録』や南都本などを加えつつ、これら諸本の間には交流の痕跡が目につき始める。読み本の中では異色の四部合戦状本の特異な、唱導資料の採取にも及ぶ検討の課題になると言うべきであろう。三本の相互の関係の位置づけよりも、その語りや内容の諸相、それぞれの読み、課題が『平家物語』論になると言うべきであろう。史料との交流を通して、さらに諸本の、いずれが史料として評価に耐えられるかが関心の軸になるのだが。今では、語り本をも加え多様な言説の語りが相互に交流しあっていること、諸本については、その諸本間の位置づけよりも諸本の言説のあり方をも含めた語りの課題となる。そうした諸本論の中で、見て来たような『盛衰記』の「内裏炎上」を考えるべきである。

ちなみに丸山眞男は「政治についてのイメージのききとり」において、堀田を

堀田善衛の「家」と文学(山下)

謀略 金の出所が自分以外にあつて、他の武門に勢力を及ぼす。
 と言う。心当たりもあるのだが、まだ十分には見えて来ない。スペイン滞在についても陰の声がかえっていたのを思い出す。わたしには堀田善衛がまだ読めていない。

注

- (1) 後述の丸山珪一は、あくまでも小説であつて、そのものが事実ではないと慎重で虚構を指摘するのだが、わたしは一種の自伝小説と見る。
- (2) 山下「鶴のいた庭」堀田善衛の文体」『愛知淑徳大学論集』20 二〇〇一年三月
- (3) 筑摩書房 一九九八年刊
- (4) 「堀田善衛を読む会」を主宰、『海龍』を刊行。「幻想文学としての「鶴のいた庭」」『第2回ふるさとの文学を語るシンポジウム』二〇一一年三月
- (5) 時枝誠記「平家物語をいかに読むかに対する一試論」『國語と國文学』一九五八年七月 現象学に立つ時枝の文章論とのめぐり合いは『日本文法 口語編』(全書)岩波書店 一九五〇年の第三章に始まる。
- (6) 山下「中世の文学 平治物語」三弥井書店 二〇一〇年
- (7) 『堀田善衛全集』13所収 一九九四年
- (8) 注(3)
- (9) 梅田祐喜「『方丈記私記』一つの読み方」『海龍』三号 二〇一四年六月
- (10) 木下順二「群読による平家物語 知盛」を踏まえる『子午線の祀り』河出書房新社 一九七九年
- (11) 市古貞次・大曾根章介・久保田淳・松尾葦江「中世の文学 源平盛衰記

名古屋大学文学部研究論集(文学)

- (一) 三弥井書店 一九九一年
- (12) 山下「延慶本『平家物語』が語る後白河法皇」『文学』二〇一四年一月
二月
- (13) 一九四二年から一九四五年までの日記。岩波文庫 一九九〇年
- (14) 朝日新聞、一九七一年十一月八日から一九七二年五月二十七日まで、夕
刊に百六十二回にわたって連載され、一九七二年五月、朝日新聞社から
単行本として刊行、全集第六巻におさめる。
- (15) 『天狗草子』などをめぐって思想史論的な展望を行った。「延慶本『平家
物語』が語る後白河法皇」『文学』二〇一四年一月・二月
- (16) 山下「源平盛衰記と平家物語」『文学』一九七三年五月(『平家物語の生
成』再録)
- (17) 津田左右吉「平家物語と源平盛衰記」『史學雜誌』大正四年(一九一
五)七月
- (18) 大津雄一「軍記と王権のイデオロギ」翰林書房 二〇〇五年
- (19) 山下「平家物語論のために」『日本文学』一九八一年九月
- (20) 山下「源平盛衰記の語り」『國學院雜誌』二〇〇二年五月
- (21) 美濃部重克「中世文学の諸相」三弥井書店 一九八八年
- (22) 麻原美子ら編『平家物語』長門本対照本文』勉誠出版 二〇一一年
延慶本
- (23) 丸山眞男『自己内対話』みすず書房 一九九八年

キーワード…廻船問屋、近代化、莫迦莫迦しい、皮肉

Summarize

History of the Hottafamily: Reading “Suikan” or Drunken

Hiroaki Yamashita

The soldiers of Enryakuji who protected the royal palace and Pope Goshirakawa, shot the palanquins which monksoldieres carried on their shoulders. The monks had presented a direct petition to the Pope Goshirkawa about court soldier's violences . Monk's wrath developed so much that the Pope punished Narita, not his leader Shigemori but a vassal Narita. Narita was degraded to local area Iga (Mie prefecture). Then his friends took a farewell meeting for Narita. The more they drank sake, the more melancholic they became. Finary their wrath developed to suicide, while they were setting fire to his house. The fier spreaded to the Royal Palace.

The famous fire, we can read that Angennnotaiqwa was caused by Narita's anger, the story told.

This is the story which the Genpeijousuiki told. Hotta Toshie rewrote this story as “Suikan” or drunken. Acording to Hotta, Narita and his freinds thought the govermental compromise ridiculous or “bakabakashii”. Hotta thought this story reminded of the ruin of the Hotta's family itself. He built a comedy about the govermental compromise, rewriting Genpeijousuki.

Keywords: shipping agent, modernization, ridiculous, irony